

家政学における住居学について「人間守護」の概念は是とされるべきか(VII)

—住むとは何かについてその意味を問ひ住居学の研究と方法を求める—

郡山女大家政 ○深谷笑子・関口富左

○家政学における住居学とはいかなる内容を有すべきであろうか。また住居学と建築学との関連および相異点は何か。

演者らは、家政学部における住居学の本質的視点は何かについて、家政学における住居学としてこの点を求めるものである。

○住居とは、「住む」「居る」とが連動し、そこに人間が定着し、時間と空間の中で生活が展開されることとみる。このことは、人間のあらゆる生活行為がここに住むことによって根源的に行われる。すなわち、他を遮蔽し、他からの危険を防ぎ、安んじて眠る、食べる、子を生み育て、また外部労働の疲れといやし、新しい活力をつくる根拠地である。ボルノーはこの点を『人間とその家』において述べている。また事実、われわれは「住居」という建造物によって天候の不順や外敵からの身を守り、血縁者との生活が行われることは何人も疑う余地のないことである。しかしまた、単なる建造物という物質的要件のみでなく、愛によって結ばれた家族が互いにいたわり合いつつ、意味のある秩序をもち、また家具調度品等のかかわりにおいて、安らいだ生活がなされている。このことは、建築学での安全性、機能性、合理性ということのみではなく、人間の精神と主位に置きながら、心身ともに人間が守護される安全な生活となしうる場である。

○演者らは、住居学における従来の研究課題及び方法のうち「人間守護」の概念がどのように存在するかをみたが、建築学と住居学との相異点を明確に着取することはできなかった。このことは家政学としての住居学の研究目的の中心概念の曖昧さによる。